



下館城主・水谷氏が結んだ絆 岡山県高梁市

市は、岡山県高梁市と友好都市提携を再締結しました。古くは備中国の中核を占め、近世に至っては、備中松山藩を中心として繁栄を続けた高梁市。今回は、その高梁市について紹介します。

交わした固い握手・友好都市提携を再締結

高梁市は、岡山県の中西部に位置する人口約3万8千人の都市。市内には高梁川が流れ、その両側には吉備高原が東西に広がっています。年間を通して霧の発生が多く、高原部では昼夜の温度差が大きいものの、低地部は比較的温和な気候に恵まれた場所です。古来、高梁市一帯は『備中国』の中核を占め、近世は幕藩体制のもと、備中松山藩を中心に繁栄。近世以降も、政治や経済、教育の中心地として発展を遂げてきました。また、備中松山城(写真上、国指定重要文化財)をはじめとする観光資源が豊富で、吉備国際大学や順正短期大学などが立地し、若い力が集まる学園文化都市でもあります。

その高梁市で1月30日、筑西市と高梁市による友好都市提携再締結の調印式が行われました。今回の調印式は、昭和54年に旧下館市と旧高梁市が締結した友好都市提携を、市町村合併で新しく誕生した筑西市と高梁市(平成16年10月1日に旧高梁市、有漢町、成羽町、川上町、備中町の1市4町が合併)が再締結したものです。式典会場の市議会議場には約50人の両市関係者が集まり、筑西市の富山省三市長と吉澤範夫議長、高梁市の秋岡毅市長と長原寛議長が協約書に署名。固く握手を交わして、両市の末永い友好と交流を約束しました。

筑西と高梁・両市を結ぶ歴史的背景

現在、下館小学校北側の八幡神社境内に下館城址と刻まれた石碑が建っています。これは、下館小学校のある本城町を中心とする場所に下館城があったことを示すもので、この城を築いたとされるのが水谷氏です。水谷氏は、初代城主・水谷勝氏が文明10年(1478)に城を築いて以来、城主(後に下館藩主)として代々この地を治めました。中でも戦国時代に活躍した6代・水谷正村(蟠龍斎、政村とも)は、戦をすれば連戦連勝で、その武勇を恐



- 1 岡山県下最大の規模をほこる夏の風物詩『備中たかはし松山踊り』
- 2 川上マンガ絵ぶた公園で毎年開催されている『マンガ絵ぶたまつり』
- 3 中国地方随一といわれる勇壮華麗な仕掛け花火で知られる『成羽愛宕大花火』
- 4 国の重要伝統的建造物群保存地区に選定された町並みが残る『吹屋ふるさと村』
- 5 国の重要無形民俗文化財に指定されている『備中神楽』

高梁市

人口= 38,799人(平成17年国勢調査) 面積= 547.01km²
 市の花=さくら 市の木=あかまつ 市の鳥=ヤマセミ
 特産品=松茸、シャクヤク、トマト、鮎、ニューピオーネ(巨峰とマスカットをかけあわせた種なしブドウ)

れられたといわれています。水谷氏による建立または関連の深い場所として、菩提寺である定林寺(岡芹)、久下田城跡(樋口)、羽黒神社(大町)などが、現在も筑西市内に残されています。

時代は下って、江戸時代初めの寛永16年(1639)。8代下館城主・水谷勝隆が、備中成羽(旧成羽町、現在の高梁市)へ移封され、寛永19年(1642)には備中松山(高梁市)藩主となりました。勝隆は、高瀬舟が円滑に航行できるよう高梁川を整備し、新田開発や鉱山業の振興に力を注ぐなど、城下の繁栄に尽力。その死後も松山藩2代・勝宗、3代・勝美と事業は引き継がれ、備中松山藩の基礎を築きました。今も残る備中松山城の天守は、勝宗によって現在の姿になったものです。

それぞれの発展に大きく貢献した水谷氏という歴史的な結びつきによって、旧下館市と高梁市は友好都市となり、以降、民間団体などを含めた交流が図られてきました。今回の再締結によって、筑西市と高梁市の交流が更に深まることが期待されます。

だって、君はひとりで勝手に何かをやってゆくことなんて、出来ないだろう

映画『えんとこ』と伊勢真一監督講演会

市では、「みんなの人権を考える集い」を2月10日、明野公民館で開催し、ドキュメンタリー映画「えんとこ」の上映と映画を制作した伊勢真一監督の講演会を行いました。

映画「えんとこ」は、寝たきりの男性と介助の若者たちの3年間にわたる日々を記録したもの。障害者と若者たちのありのままの姿をフィルムに納めた伊勢監督の意志が、詰めかけた大勢の観客にも伝わり、あらためて人権を考える集いとなりました。映画会と講演会に寄せられたアンケートを紹介します。



▼映画が

終了した時に

は体中が熱くなり

ました。「介護のみなさん

バンザイ、遠藤さんバンザイ」と叫びた

くなりました。生きる事は多くの人と

の係わりが一生涯続きます。大切にして

いきたいとしみじみ感じました(60代・

男性) ▼遠藤さんの生き方にはただだ

だ驚きと感動の連続でした。遠藤さん

からのメッセージを心に刻んで、あり

のままの姿を大切にして生きていこう

と思います(40代・女性) ▼遠藤さん

には、何か惹きつけるものがあるのだ

と思います。卒業生が千人というのは

大変驚きました(30代・男性) ▼人間っ

て強い。優しいね。一人では生きてい

けない。人に頼られ、頼って生きていく。

時には弱くてもいいと思う(60代・女性)

▼介護メンバーが活躍する姿、これが

本当のボランティアなのだ感激した

(60代・男性) ▼人に迷惑をかけてはい

けないのだろうが、かけてもいい場合

がある事を知った(60代・女性) ▼寝

たきりで自

立っている人が

いるなんて初めて知

りました。命をつなぐ若者

たちが輝いて見えました。えんとこの

活躍に期待します(40代・女性) ▼家

族5人で来ました。子どもたちも何か

感じたようです(40代・女性) ▼人権

の基本である人と人との出合いの重さ

を痛感しました(50代・女性) ▼自由

に行動できる自分に、忘れていた感謝

の気持ちを気づかせてくれました。一

日一日を大切に、役に立つ人間になら

うと思えました。五体満足なのだから

(50代・女性) ▼利益を度外視して、自

主映画を制作する監督に感服しました

(70代・女性) ▼命を粗末にする、昨

今の事件が多い中、もつと若い人たち

に見てもらいたい映画だと思いました

(60代・女性) ▼監督の「弱さの力」と

いう言葉に感銘を受けました。遠藤さ

んと出逢うべくして出逢い、こんな素

敵な映画ができて良かった(40代・女性)

ありのままの
命にカンパイ

■映画監督・伊勢真一氏

昭和24年生まれ。映画『奈緒ちゃん』など長編ドキュメンタリー映画を制作。旧下館市の広報映像『心ありき 陶芸家、にんげん板谷波山』『ふるさと幻影 洋画家 森田茂の世界から』(全国広報コンクール映像部門特選)『大いなる志 偉人 中尾喜久の歩み』『髷漆 職人 大西勲のつづやき』や書家・浅香鉄心、洋画家・飯泉俊夫、陶芸家・丸山輝悦、洋画家・柳田昭、三河万歳・若杉親子編などを制作。これらのビデオは、『地域交流センター・アルテリオ』の映像コーナーでご覧になれます。

■文化財防火デー防災訓練

1月26日、黒子の千妙寺で、文化財防火デー防災訓練を実施しました。市や消防署、消防団、地域住民、関城幼稚園の園児たちなどが参加し、消火訓練などを行いました。

■男女共同参画社会をめざして講演会



1月28日、コミュニティプラザで、男女共同参画をめざす講演会を開催しました。NHK連続ドラマ『おしん』の制作などを手がけたドラマ・プロデューサーの小林由紀子さんによる『チャーミングに生きる』と題した講演や、小中学生を対象とした『男女共同参画に関する作文コンクール』の最優秀賞受賞者による受賞作品の朗読などが行われ、満員の来場者が男女共同参画社会についての理解を深めました。

■簡単・便利なe-Taxで確定申告



2月1日から、コミュニティプラザの特設会場で、下館税務署による確定申告の受付が始まりました。16日には富山県三市長が、e-Tax（国税電子申告・電子納税システム）を利用して申告を行いました。e-Taxは、自宅などからインターネットを通じ、国税の各種手続きを行うことができるシステムです。

■広報筑西ピープルが県広報コンクールで特選

平成18年（第52回）茨城県市町村広報コンクールの審査が行われ、広報紙の部で、『広報筑西ピープル11月1日号（No.39）』が最高賞である特選に選ばれました。

現代茨城の陶芸展

コレクション／コネクション—— 収蔵品から見えること

茨城県陶芸美術館

笠間市笠間2345番地（笠間芸術の森公園内）
Tel. 0296-70-0011

茨城県陶芸美術館では、5月13日（日）まで、同館が所有する多くの収蔵品のなかから、茨城ゆかりの8作家10作品を展示しています。このなかには、筑西市出身の板谷波山（名誉市民・名誉県民・文化勲章受章者）の作品や波山に師事した、古宇田正雄（つくば市）の作品も展示されています。



板谷波山
（明治5年—昭和38年）

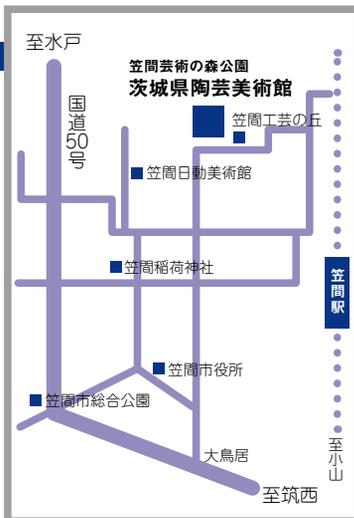
下館町に生まれる。本名、嘉七。東京美術学校彫刻科にて岡倉天心、高村光雲らに学ぶ。彫刻科教諭として赴任した石川県工業学校で陶磁制作を始め、明治36年東京田端に築窯、郷里の筑波山にちなみ、波山と号して陶芸家として独立。巧みな薄肉彫とアール・ヌーヴォー様式の意匠を融合させ、釉下彩による色彩豊かな文様表現、葆光彩磁を完成させた。昭和28年陶芸家として初の文化勲章を受章。



古宇田正雄
（明治31年—昭和52年）

菅間村洞下（現：つくば市）に生まれる。大正13年東京美術学校会計課員として勤務の傍ら、授業を聴講し、工芸に興味を持つ。この間、校内で知り合った板谷波山に薫陶を受ける。昭和8年帰郷し、波山指導のもと洞下の自宅裏に倒炎式窯を築窯。昭和20年下館に疎開した波山のために洞下の窯の傍に仮寓を建て、5年間制作を共にした。

■茨城県陶芸美術館へのアクセス



『心ありき』上映中

『現代茨城の陶芸展』開催中、館内において、旧下館市公聴広報課が制作した、『心ありきにんげん 陶芸家 板谷波山』（伊勢真一監督）が上映されています。美術館に足をお運びの際は、ぜひ、ご覧ください。

■上映 = 5月13日（日）まで
毎週水、金、土曜日
午後2時30分～